

＜カリキュラム開発＞

合科的な指導の在り方

～ 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成 ～

大垣市立興文中学校 教諭 國枝 秀祐

(共同研究者：三輪 大輔，西脇 彩香，伊藤 智晶，柳瀬 あすか)

概 要

戦争を二度と起こさないように行動する資質・能力を育成するために、教科担任と連携して実践を行った。まず、「単元配列表」を作成し、各教科の学習内容と学習時期を明らかにした。3年生の国語科、社会科、英語科において、戦争について学ぶ単元があることが分かった。各教科の学びを整理し、役割を意識しながら教科横断の単元を構成し、「単元構造図」を作成した。社会科で歴史的事実を多角的に分析したり、国語科で戦時下に生きた人々の気持ちを考えたりしたことを、英語科で統合し、具体的に何をすべきか考えた。生徒たちの言動から、戦争を二度と起こさないという強い覚悟を感じ、一定の手応えを感じた。教科横断の実践によって、教科等の枠組みを踏まえて育成を目指す資質・能力だけでなく、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力も育成することが可能だという示唆を得た。この実践が広がり、汎用性のあるものになることで、全国の生徒たちが戦争を二度と起こさないために行動できるようになることを切に願う。

1. 主題設定の理由

ロシアがウクライナに侵攻してから早いもので3年が経とうとしている。トランプ前米大統領が「私たちの地球は第三次世界大戦の淵に立たされている」と発言するなど、私たちの生活と戦争は遠いようで繋がっている。しかし、日本が平和であるが故に、多くの子供たちがその危険性に気付いていない。二度と戦争を起こさないために、次世代に戦争の恐ろしさを伝え、適切に行動できる資質・能力を育成するにはどうしたらよいのか。

多くの学校では、総合的な学習の時間を活用して、「平和」について探究的な学習の過程を仕組む事で、この資質・能力を育成しようとしている。例えば、過去に私が勤めた中学校では、中学校3年生で「平和」を題材として扱い、被爆者の講話を聞いたり、千羽鶴を広島の平和記念公園に捧げたりすることを通して、戦争を二度と起こさないために行動する資質・能力を育成していた。

しかし、今の勤務校のように、総合的な学習の時間で、「平和」を題材として扱わない学校はどうすればよいのか。現に、本校の3年生の生徒たちは戦争を他人事として捉えている実態があった。英語科の“Let's Read2 A Mother's Lullaby”という戦争を題材にした話を音読劇した際も、母親を見失い、必死に探す男児の“mommy”というセリフをふざけて読む姿が見られた。これ

では、過去の先人たちが築いてきた平和がいつか失われ、惨劇が繰り返されてしまうかもしれない。この由々しき事態を一教員として見過ごすことができないと考えた。

生徒たちに、戦争を二度と起こさないように行動する資質・能力を育成するためにはどうしたらよいのか。本論文は、中学3年生を担当する教科担任との挑戦の記録である。

2. 研究仮説

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編を参考に、手立てを模索した。総則編には

平成28年の中央教育審議会答申では、数多く論じられている資質・能力を以下のように大別している。

- ・例えば国語力、数学力などのように、伝統的な教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる力としての在り方について論じているもの。（＝教科等の枠組みを踏まえて育成を目指す資質・能力）
- ・例えば言語能力や情報活用能力などのように、教科等を越えた全ての学習の基礎として育まれ活用される力について論じているもの。（＝あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力）

* 太枠は戦争に関わる単位)

②教科を超えた教材研究

次に、国語科や社会科、英語科における学びは何かを整理することにした。社会科の三輪と懇談したり、国語科の西脇から教科書を借りたりしながらそれぞれの教科で学習する内容を整理した。（図表2 参照）

教科	学習内容
社会科	・なぜ日本が第二次世界大戦に突入していくことになったかターニング・ポイントを考える。 ・ひめゆり学徒隊の惨劇について学ぶ。 （歴史的事実を多角的に分析する）
国語科	・石垣りんさんの心情を考えることを通して、平和慣れしてしまっている私たちに警鐘を鳴らしていることに気付く。 （戦時下に生きた人々の気持ちを考える）
英語科	・Ghandi の人生について学んだ上で、平和のために何ができるか考えて提案する文章を書く。 （具体的な提案を分かりやすく表現する）

（図表2 各教科の学習内容）

研究内容2 合科的な単元構成

①教科の役割を明確にした「単元構造図」の作成

まず、筆者が単元指導計画を作成した。（図表3 参照）

時	ねらい	知	思	態	評価規準
1 社	日本における戦争の歴史を整理することを通して、年表にまとめることとよいことに気付く、戦争の歴史を年表にまとめることができる。	○			戦争の歴史を年表にまとめている。
2 国	「挨拶―原爆の惨状によせて」を通して、作品に込められた作者の思いを考えたことができる。		○		作品に込められた作者の思いについて考えることができる。
3 社	日本が第二次世界大戦に突入していったターニング・ポイントを考えることを通して、多角的に考えることの大切さに気付く、ターニング・ポイントになった出来事を理由とともに書くことができる。		○		ターニング・ポイントとなった出来事を理由とともに書いている。
4 国	作者のものの見方や考え方について考える活動を通して、作者が戦争の悲惨さを忘れないでほしいと願っていることに気付く、作者の戦争に対する思いについて表現することができる。	○			作者の戦争に対する思いについて表現できている。
5 社	日本が第二次世界大戦に突入していったターニング・ポイントを交流することを通して、多角的に考えることの大切さに気付く、多角的にターニング・ポイントを考えたことができる。		○		多角的にターニング・ポイントを考えている。
6 国	戦争についての思いを交流する活動を通して、人々が極限状態の中で戦争に向かわなければならなかった悲惨な状況下にあったことに気付く、戦争についての自分の思いを書きまとめることができる。		○		戦争についての自分の思いを書きまとめている。
7 英	戦争を二度と起こさないためにどうすべきか意見文を書く活動を通して、具体的に考えることとよいことに気付く、戦争を起こさないために具体的にできることを表現することができる。		○		戦争を起こさないために具体的にできることを表現できている。

（図表3 単元指導計画 ＊社会と英語は戦争に関わる部分のみを掲載）

この際に意識したことは、英語科の表現活動は、単元の最後に位置付けることである。戦争について表現することは、語彙を考えてもかなり難易度が高い活動になることが予想できた。そのため、ノーベル平和賞を受賞した被団協について紹介したり、子供の貧困を解決する方法を考えたりして、語彙や提案文書の書き方を習得し

た上で英語科の表現活動に向かえるように単元をデザインした。また、社会科で事実を学ぶだけでなく、国語科で人々の気持ちに迫ることも大切にしたいと考えたからだ。かつての勤務校で「平和」を学習した際に、過去の戦争や他国で起こっている戦争を、どのように生徒の「自分事」にするかに苦心した経験があった。その際に、やはり生徒に一番効果的だったのは、人の言葉であった。被爆者の生の声を聞くからこそ、リアルな場面を想像できた。その経験から、社会科で事実を、国語科で心を揺さぶりたいと考えた。

その後、夏休みに教科担任同士で個別に相談を重ねたり、全員で構造図を確認したりしながら、指導観を擦り合わせていった。その中で、「それぞれの教科の内容を、順番を決めて枠にはめてしまうこと」よりも、「各教科の役割を意識し、柔軟な捉えで単元を仕組むこと」を大切にすべきだという結論に至った。授業の進度は学級によって異なり、必ずしも単元指導計画のように、授業が進まないことを想定しての意見であった。そこで、出来上がったのが、図表4の「単元構想図」である。

社会	国語
「二度の世界大戦と日本」 →復習しつつターニングポイントを設定する。 第一次世界大戦後、世界恐慌のあおりを受けた日本は、満州事変を起こし、満州を手に入れたことで経済的・国防的な問題を解決しようと考え、その課程で軍国主義的な国家へと進んでいった。更に日本は中国を侵略し（日中戦争）、その課程で連合国の経済封鎖に遭う。自尊自衛のため、アメリカとも戦い（太平洋戦争）日本は多くの犠牲を出して敗戦した。第一次世界大戦後の国際協調の風潮は希薄で、深刻な不況もあり、二度目の世界大戦が起きたのは仕方ないのではなか	「挨拶」 今でも原爆のニュースなどを目にすることがある。戦争は多くのものを失う悲しいことであり、当時広島島にいた人々はとても悲しい思いをしたと思う。今、日本はとても平和なので、この平和な状態が長くいいなと思った。
「1945年3月 沖縄戦 ひめゆり学徒隊」 師範学校等教員と生徒240名が看護要員として動員され、その内136名の生徒が亡くなった。米軍包囲網の中で身近な友達や次々と戦死し、生き残った人も常に死と隣り合わせな現実には戦争の悲惨さや恐怖を感じた。	国語科 ^{本時} 「挨拶」 原子爆弾や戦争は多くの人の命を奪う。怖いもので、絶対に起こしてはいけないものだと思う。今は平和な状態であまり考えたことがなかったが、戦争を再び起こさないように、自分の生活を見直し、生活していくことが大切だと感じた。
社会科 ^{本時} 「戦争へのターニングポイントは何だろう」 二度の世界大戦が起きた頃の世界の国々は、自国の利益を優先する傾向が強く、経済が苦しい状況で戦争による植民地化の動きで怖い、国際協調がままならない時代であった。戦争という手段での解決は当時仕方ない部分もあったが、そのために多くの人の命が犠牲になったことを忘れません。	「挨拶」 戦争は自分たちには無縁なものだと考えていたが、自分たちが大人になるにあたって、戦争の恐ろしさを伝えたり、戦争を引き起こさないような言動を考えたりしたい。

英語科 ^{本時} How can we prevent wars? We should not have any weapons. If we have a gun, we cannot trust others. Let's stop making nuclear weapons.	課外活動 “A Mother's Lullaby” 音読劇の発表(大垣市立図書館と連携) 戦争を二度と起こしてほしくないという思いを音読劇で表現することができた。
--	---

〈単元の学習後の生徒の意識〉 戦争について学習する中で、戦争の悲惨さに気付いた。人々は極限状態の中で戦争に向かっていかなければならなかったことを知り、その時代に生きた人々の気持ちを考えると、胸が苦しくなる。二度とこんな思いをしなくていいように、戦争がない世界を築いていきたい。まずは、他者を受け入れる寛容の心を大切にしたい。

（図表4 「単元構想図」）

それぞれの役割を明確にすることで、それぞれの教科でどんな意識になればよいかを明らかにできた。

②教科担任同士の連携

実際に授業を行う際には、各教科の役割や系統性を意識して取り組んだ。例えば、国語科の授業では、戦時下の人々の気持ちに気付くことができるよう、原爆によって全身をやけどした人の写真を見せた。残酷な写真であるが故に、生徒に見せることに抵抗もあったが、戦争の現実を生徒に示すためにも、あえて示すことにした。

国語科の3時間目では、「挨拶」について考えたことを作文にまとめた。5名の生徒の作文を紹介する。

（前略）このような作者の思いから私は、広島
の被爆者になった人たちは今生きている私たち
のように、「安らかで美しい顔」をして明日
も同じようにこんな顔ができるだろうと油断
していたから悲劇が起こってしまったことを
痛感した。実際原爆で亡くなった方も原爆が落
とされるなんて夢にも思ってもなかったと思
うから平和慣れし過ぎに毎日が当たり前に過
ぎて本当に良いのかをよく考えてこれからの
未来を変えていきたい。

（前略）私はこの詩を読んでから、日常生活の
中で今までには無かった、戦争や原爆への恐怖
や次いつ起きるか分からない不安を感じるよう
になった。これは今までの私が、戦争や原爆は
過去のものだと思い込み、完全に「平和ボケ」
していたことの裏返しだということに気付い
た。まさに、自分が「油断」していたというこ
ことを思い知らされた。

もう二度と戦争や原爆の被害をくり返さない
ためにも、まず今ある日常に感謝し、戦争や原
爆についての理解を深めるところから始めてい
きたいと思った。

（前略）この作者の思いから私は紛争に留まら
ず、政治などの身近なことから自分事として捉
えていきたいと感じた。今の政治や若い世代の
投票率に危機感を持ち、公民の授業で政治対
しての考えを深めることが今の私にできる。政
治に積極的に参加するなど、身近なことから理
解を深めていけば作者の思いにある、当事者意
識で物事を見る力が身に付くと考えた。外国と
の距離が近くなっているからこそ、将来は当事
者意識で物事を見る力を国内だけでなく国際的
な問題の解決にも生かしたい。

（前略）今ロシアとウクライナの戦争や他にも
たくさん問題が世界中で起きている。けれど、
日本はずっと平和で自分には関係ない事だと
思い毎日を過ごしている自分に気づいた。今世
界が抱えている問題を自分事として捉えるべき
だと考えを見直した。

（前略）私は筆者の考えを受け、社会の授業等
で戦争を学んでも、私達には関係のない事だと
心のどこかで高を括っていた自分をとても恥
じた。だから今後は、詩から学んだ私達はいつ
でも二十五万人の一人になりえるという事を心
にとめ、周りに戦争の危険は近づいてきていな
い常アンテナを張り自分で見極める事を毎日
の挨拶のように習慣化していきたい。

「私達には関係のない事だと心のどこかで高を括
っていた自分をとても恥じた」という言葉が印象
的である。社会科の学びだけでは到達できなかった
合科の学びがここにあるように感じた。そして、
多くの生徒が「未来を変えていきたい」「原爆や
戦争について理解を深めたい」「国内外の問題を
解決したい」「アンテナを張ることを習慣化した
い」と、行動目標を立てている。このことから、
戦争を二度と起こさないために行動する資質・能
力が身に付きつつあることが分かる。

英語科の授業では、平和についての意見文を大
垣市立図書館を訪れる人に向けて書く活動を、単
元を通して続けた。その中で明らかになってきた
生徒の実態として、意見を書く際に根拠を裏打ち
する具体例が乏しいことが分かってきた。「子供
の貧困を解決するには、子供食堂を作ろう」（主
張）→「子供食堂があれば、無料でご飯が食べら
れて、子供は幸せになる」（根拠）までは書ける
が、「大垣市に子供食堂がいくつあるのか」や「子
供食堂の満足度」（具体例）を示すことができる
生徒は少なかった。分かりやすく表現する力を育
成するためにも、根拠に具体例を合わせて示すこ
との大切さに気付けるようにしたいと考え、実践
に当たった。

まず、ある生徒の作文から「当事者意識をもっ
て人生を選ぶ」という言葉を引用した。「当事者
意識をもって人生を選ぶとは、具体的にどんな行
動をとることなのか？」と問い、その答えを大垣
市立図書館を訪れる外国の方に提案する作文を書
くという目的・場面・状況等を提示した。

実際に生徒が意見文を書いた後で、中間交流を行い、「根拠に具体例を合わせて示す」ことの大切さを示した。

以下は、単元の最後に生徒が書いた意見文である。

We should know about foreign people and culture.
Do you know Anne Frank? She died in the war. She was Jewish, so she was discriminated by German people.
Sometimes, we can't understand differences of people. So we say hurtful words, but it makes foreign people sad and angry.
It's important to understand other people.
(下線部は筆者が引いたもの)

この生徒はアンネ・フランクさんがユダヤ人であるというだけで迫害を受けたという具体例を示しながら、外国の方への差別をしないように訴えている。

Never forget the war!
I think learning history of the war is important. We have to keep telling about the war, because now, the number of people who know about the war is decreasing. About 90 percent of people in Japan was born after the war. We don't know the war, but we mustn't forget about wars. You should check the internet, TV and so on.
(下線部は筆者が引いたもの)

この生徒は、日本の人口の90%が戦争を経験していないというデータに基付き、歴史を勉強することの大切さを訴えている。

How can we prevent wars?
War is too bad. Don't forget about wars. So let's listen to people damaged by the atomic bomb.
We must know war is real. In the World War II, the world lost fifteen million people. They didn't want to die. We mustn't think war was in the past.
Let's respect others. Let's think about other people's minds. Have a kindness. These are the best things to prevent wars.
(下線部は筆者が引いたもの)

第二次世界大戦で1500万人の方が亡くなった事実から戦争を忘れないことや他者を思いやるこ

との大切さを訴えている。身近な人々を大切にすることが平和につながると考え、身近な人から大切にしていこうと考えている。戦争を二度と起こさないために、自分にできることを取り組もうとしている様子が見える。

また、大垣市立図書館と連携して、平和を推進するために朗読劇発表会を行った際には、3年生の生徒9名が自主的に参加した。本校のOGである友麻亜里さんに講師をお願いし、感情の込め方をご教授いただいた。

校内に発表会への参観を呼び掛け、当日は1～3年生の生徒が20名ほど参加した。以下は、朗読発表会後に行ったインタビューの様子である。

インタビューの様子

T:戦争についてどう思いますか？

S1:今回の朗読劇を含めて、今まで学んできた中で、今世界で、いろんな場所で戦争が起きているけど、戦争というのは年齢とか性別関係なく、無差別に人の命を奪うものだと思います。日本は被爆国として、世界に対して戦争の悲惨さを伝えていけばいいと思います。

S2:戦争は、自分の大切な人とか、自分に関係のない人とか無差別に命とか日常の平和を奪っていくので、本当に二度と起こってほしくないと思います。

戦争を自分事として捉え、戦争をなくすためにどうしたらよいかを語る生徒の姿が見られた。体験的な学びの場を設定することで、資質・能力を確かなものにできたように感じる。

5.成果と課題

○「単元配列表」を作成することで、各教科の学びを整理することができた。

→さらに領域等も含めて配列を整理していくと、カリキュラム全体を見直すことにつながる。特別の教科道徳や特別活動との関連も考えていくと、より効果的な単元を構想できるかもしれない。

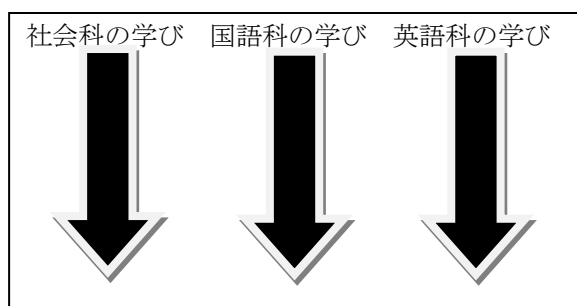
○合科の単元を構想する際には、各教科の授業の順番を決めるなどの枠にはめていくのではなく、役割を明確にし、柔軟な単元構成にするとよいことに気付くことができた。

○教科横断の実践によって、国語科で付けたい資質・能力、社会科で付けたい資質・能力、英語科で付けたい資質・能力に加えて、戦争を二度と起こさないように行動する資質・能力を育成できた。

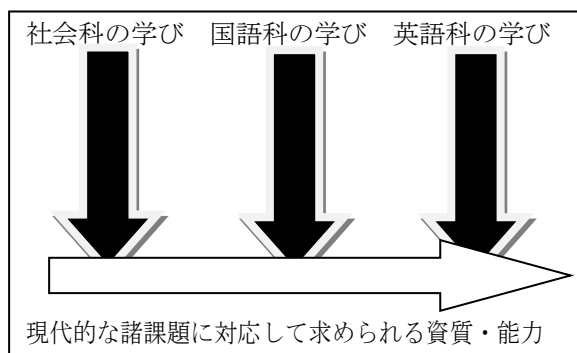
→合科的な単元を構成することで、教科等の枠組みを踏まえて育成を目指す資質・能力に加えて、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力も育成することが可能だという示唆を得た。（図表5 参照）

→この実践は、他のどの学校でも採用可能だと考えられる。さらにこの実践が広がっていき、汎用性のあるものになることで、日本中の生徒たちが戦争を二度と起こさないために行動する資質・能力を身に付け、世界が平和になることを切に願う。

従来の学び



今回の実践



（図表5 合科的な単元のメリットのイメージ）

▲生徒の実態を見た後での構想であったため、指導が後手に回ってしまった部分があった。英語科の“Let's Read2 A Mother's Lullaby”や、社会科の「二度の世界大戦と日本」全体を含めた単元構想ができれば、さらに単元を仕組みやすかったと考える。

→来年度大垣市で採択予定の教科書においても、英語科には“Let's Read2 A Mother's Lullaby”や社会科「二度の世界大戦と日本」，

国語科「挨拶」の単元はある。来年度は年度始めから構想をもち、実施していきたい。

→「防災」や「環境」など、他の現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力においても、合科的な単元を構成することで育成できないか、さらに研究を進めていきたい。

6.参考文献

- ・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編（平成 29 年 7 月）文部科学省
- ・語り合おう！進めよう！わたしたちのカリキュラム・マネジメント カリキュラムマネジメント活用の手引き 活用ガイド（令和 6 年 2 月）文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室

<講評>（最終頁の最後 1 行は空白とすること）

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11